拳の軌跡

攻略王補佐官

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゼムリア大陸西部に位置するクロスベル自治州。

様々な思惑が渦巻く、魔都を自身の庭と自称する探偵”ジョン・Ｓ・レフト”。

彼は師から教わりし武術を持ち、警察が新たに立ち上げた部署”特務支援課”へと招かれた。

目次

特務支援課 ―― 1
初仕事 ―― 5
風の剣聖 ―― 10

特務支援課

ゼムリア大陸西部の内陸部に位置する土地〝クロスベル自治州〟
北のエレボニア帝国と東のカルバード共和国と言う二大国に挟まれており、両国の緩衝地となっており、またマインツ鉱山から豊富な七耀石が採れることから熾烈な領土争いの対象となってきた歴史がある。
そういう経緯から議会には親帝国派と親共和国派がしのぎを削って勢力争いをしており半ば帝国と共和国の代理戦争の場と化している。
そんな地に一人のある青年が訪れた。
「クロスベル市……ここに戻ってくるのは三年ぶりだな」
その青年の名はロイド・バニングス。
ここ、クロスベル出身の青年で、分け合ってカルバード共和国に住む叔父の下で暮らしていた。
だが、二年ほど暮らした後、クロスベル警察学校に入学し、つい先日卒業した。
さらに卒業と同時に捜査官試験に合格し、捜査官としての資格取得し、今日、三年ぶりにクロスベル市へと帰って来た。
「列車の中でお爺さんたちに聞いていたけど、随分と様変わりしたな」
三年ぶりに訪れた街は色々と変わっており、ロイドはその街並みを眺めつつ、クロスベル警察署へと向かった。
「街並みは変わっても、警察署の位置までは変わってないか。それにしても……」
警察署の前に着いたロイドは懐から一枚の封書を取り出す。
それはロイドに宛てられた配属命令書だった。
『ロイド・バニングス殿
クロスベル警察本部・特務支援課への配属を命ずる』
「特務支援課……警察学校のカリキュラムでは説明がなかったけど、一体どんな部署なんだろ？……ま、行けば分かるか」
命令書を仕舞い、警察署内へと入る。

「すみません」
「こんにちは。ようこそ、クロスベル警察へ。どのような御用でしょう？」
「今日からこちらに配属になりました、ロイド・バニングスです。よろしくお願いします」
　敬礼をし、ロイドはそう言う。
「あ、新人さんですね。これからよろしくお願いします。あれ、でも、今日新人の方が来るって連絡受けてませんけど……」
　受付の女性警察官にそう言われ、ロイドも困惑する
「クロスベル警察ではなくてクロスベル警備隊ではないんですよね？」
「はい、警察本部で合ってるはずです。一応、警察官学校で捜査官の資格も取得しましたし」
「そうなんですか!?凄いですね、新人の方では珍しいですよ！でも、それなら尚更連絡がないのはおかしいですし……配属はどちらですか？」
「えっと……特務支援課って言う部署なんですが……」
「特務支援課？……そんな部署ありましたっけ？」
「え？……ないんですか？」
　困惑するロイドと女性警官。
「お～、来やがったか」
　そんな二人に一人の男が声を掛ける。
「あ、セルゲイ警部！」
　セルゲイと呼ばれた無精ひげの男は、二人に近寄り、ロイドの肩に手を置く。
「フラン、コイツはうちで引き取る奴だ」
「あ、思い出しました！警部が立ち上げた新部署の名前でしたね！」
「ああ、そうだ。ま、半年も経たずに潰れるかもしれんがな」
　そう言ってセルゲイはロイドと対面する。
「特務支援課課長、セルゲイ・ロウだ。お前が、ロイド・バニングスだな？」

「は、はい！ロイド・バニングス！クロスベル警察・特務支援課への着任を「ああ、それはまだいい」
　着任報告をしようとしたロイドを、セルゲイは口を挟んで止めた。
「え？」
「着任報告はまだ早いってことだ。とりあえず、付いて来い。他の奴らを紹介する」
　そう言ってセルゲイは奥の廊下へと向かい、ロイドも慌て気味に後を追う。
　ロイドが連れて来られたのは警察署内にある会議室だった。
　会議室内には、既に４人の人物が居た。
　赤毛の男とパールグレイの髪の少女、黒いローブの様な服を着た青い髪の少女、そしてソフト帽を被った茶髪の青年だった。
「待たせたな、コイツが最後のメンバーだ。自己紹介しろ」
「あ、はい！」
　前に出される形で、ロイドは自己紹介をしようとする。
（あれ？この人達先輩って呼ぶにはあまりにも……新人？いや、それにしたって若すぎる子もいるような……）
　他のメンツを見て、ロイドは思わず呆ける。
「ん？おい、どうした？名前と出身だけでいい」
「す、すみません！」
　セルゲイに声を掛けれら我に返ったロイドは、一つ咳払いをして自己紹介をする。
「ロイド・バニングス、出身はクロスベルです。警察学校を卒業したばかりの若輩者ですがよろしくお願いします」
「ランディ・オルランドだ。クロスベル警備隊から来た。ま、よろしくな」
「初めまして、エリィ・マクダエルです。私も出身はクロスベル、よろしくお願いします」
「ティオ・プラトーです。レマン自治州から来ました。よろしく」
　赤毛の男〝ランディ〟、パールグレイの髪の少女〝エリィ〟、青い髪の少女〝ティオ〟が自己紹介をし、最後にソフト帽の茶髪の青年が

自己紹介をする。
「俺はジョン・S・レフト。同じくクロスベル出身だ。よろしくな」
ジョンはソフト帽は軽く持ち上げ、会釈する。
全員の自己紹介が終わると、ロイドはセルゲイに特務支援課とは何の仕事をするのかを訪ねた。
その直後、セルゲイの持っていた通信機に着信が入り、セルゲイが出る。
二言、三言話すとセルゲイはにやっと笑う。
「喜べ お前たち。特務支援課が何をする部署なのか分かるぞ。……初仕事だ」

初仕事

セルゲイに案内され、五人が着いたのは駅前通りの近くにある鉄扉の先にある階段を下りた先だった。
「セルゲイ課長。一体俺達に何をさせるつもりなんですか？」
「まさか資材の跡片付けとか？」
「ここだよ」
ロイドとランディの言葉に、セルゲイは近くの扉を指差す。
「ここはクロスベル市の地下に広がる〝ジオフロント区画〟の入り口だ。お前たちには今からここに潜ってもらう」
セルゲイの言葉に全員が驚く。
「ええ!?」
「も、潜るって……」
「おいおい、どういうことっスか？」
「流石に説明してくれよ、セルゲイさん」
「……」
四人は思い思いの反応をし、セルゲイは説明を続ける。
「お前たちの総合能力、及び実践テストの為だ。内部はそれほど手強くないが魔獣の類がⅦ徘徊している。それらを相当しながら一番奥まで行ってもらう」
「ま、待って下さい！」
セルゲイの説明にロイドが反論の声を上げた。
「テストはともかく、どうして魔獣が徘徊しているところに行くんですか？それに、警備隊ならまだしも、これは警察官の仕事じゃないですよね？」
「確かに普通は警察官の仕事じゃないだろう。だが、特務支援課のメンバーは別だ」
「え？」
「詳しい説明は後でする。まずは、コレを受け取れ」
そう言ってセルゲイは先程、自身が使っていたのと同じ携帯端末を五人に渡す。

「これは……」
「最新式の戦術オーブメントかしら？」
「へぇ～、結構洒落てんじゃねぇか」
「エプスタイン財団の奴か」
「そうですね。第五世代戦術オーブメント、通称〝ＥＮＩＧＭＡ〟。ようやく実戦配備ですか」
「ああ、先日財団の方から届いた。既にお前たちの特性に合わせて調整してある。使い方はティオ、お前がレクチャーしろ」
「……面倒だけど了解です。新型用の結晶回路（クオーツ）はありますか？」
「ああ、少ないがある。それにコイツと、ついでにコイツもな」
セルゲイから各人に結晶回路（クオーツ）と〝捜査手帳〟、〝戦闘手帳〟が渡され、最後にロイドにジオフロントＡの鍵が渡される。
「それじゃ一通りの魔獣を掃討したら本部に戻ってこい。細かいことはその時に説明する」
そう言いセルゲイは階段を上っていく。
「ちょ、セルゲイ課長!?」
「あ、そうだ。それと、ロイド。お前がリーダーな」
「へ!?」
「捜査官として正式な資格を持ってるのはお前だけだからな。それじゃ、頼んだぞ」
最後にそう言い残し、セルゲイは去って行った。
「なんか押し付けられちまったな」
ランディはロイドの肩を叩き笑いながらそう言う。
「ま、頼まれた者はしょうがねぇだろ」
ジョンもロイドの肩に手を置きそう言う。
「でも、捜査官としての資格を持っている人がいて心強いです、ロイドさん、よろしくお願いします」
「いや、ロイドでいいよ。ところで、皆歳は幾つなんだ？近そうに見えるけど……俺は１８だ」
「あら、私も１８よ」
「俺１９だ」

「俺は２１だけど、堅っ苦しいしタメ口でいいぞ」
「私は１４です」
「えっ!?１４歳!?」
　ティオの年齢にロイドが驚く。
「何か問題が？」
「い、いや、一般の警察官でも最低年齢は１６歳のはずじゃ……」
「それならご心配なく。私は警察官じゃありません。エプスタイン財団から出向したテスト要員です」
「……なるほどな。それじゃあ、その鞄の中身が君の出向理由か」
　ジョンはティオの足元にある鞄を見て言う。
「はい、そうです」
　そう言ってティオは鞄からある物を取り出す。
「それは……機械仕掛けの杖？」
「魔導杖（オーバルスタッフ）、これの性能テストが私の目的で、出向理由です」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！ひょっとして、君も戦うのか？」
　１４歳のティオが戦闘に参加するような物言いに、ロイドは声を上げる。
「そうですけど？」
「いくらなんでも、１４歳の子供にそんな危険な事……」
　ロイドは警察官としての立場からティオの参加に否定的だった。
　だが、ティオもまた性能テストの為に来たので戦闘しないと意味がないため、退く気はない。
　そんな中をランディとジョンが割って入る。
「まぁまぁ、落ち着けって。納得できないかもしれないが、今はあのオッサンに押し付けられた厄介事を片付けようぜ」
「ここで揉めても始まらないしな。言いたいことは仕事を片付けてからでも遅くはないだろ。それに、もし危険があったとしても俺らでフォローすればいい。違うか？」
　ランディに宥められ、ジョンに説得され、ロイドと、何も言わなかったもののやはりティオの参加に否定的だったエリィの二人は一先ず納得した。

「とりあえず、ジオフロントに潜る前に全員の武双を確認しよう。ティオは、その魔導杖として、三人の武装は？」
「私はコレよ」
　エリィが出したのは、少し旧い型（タイプ）の導力銃だった。
「競技用の物をカスタマイズしたものだけど、狙いの正確さは期待してくれてもいいわ」
「そんじゃ、次は俺だな。俺はコイツだ」
　ランディは背負っていた包みを外し、武器を出す。
「スタンハルバードだ。ちょいっと重いが一撃の威力は中々のモンだぜ。そんでロイド。お前さんのは？」
「俺はコイツさ」
　ロイドが取り出したのはトンファーだった。
「それは、警棒の一種？」
「確かトンファーって言う東方の武具だったか？殺傷力より、防御や制圧力に優れてるって聞いてるが……」
「なるほど。実に警察官らしい、良い武器だな。それじゃ、最後は俺だな」
　そう言いジョンは取り出した武器を手に嵌めて見せる。
「それは……籠手か？」
「ああ。戦闘用に色々手を加えてある。まぁ、一応戦えるから安心してくれ」
「取り合えず、ティオの魔導杖がどういう物かは判らないけど、戦闘になったらバランスよく戦えそうだ」
「その辺も考慮して集められた人選だろうな。セルゲイさんらしい」
「あのオッサン、とぼけた顔して意外としたたかだな」
「そうですね」
　互いの戦闘スタイルを教え合い、最後にティオがＥＮＩＧＭＡについて説明をしようとするが、使い方は従来の者と変わらず、本命は新機能の方なので追々と説明することになった。
「それじゃあ、中に入ろう。安全を第一に。気を付けて進もう」
「ええ、そうね」

「了解です」
「おう」
「そんじゃ、行くとしますか」

風の剣聖

ジオフロントに入り、五人が最初に見たのは、導力ケーブル等が張り巡らされており、インフラ整備も整っている、とても魔獣がいそうにない場所だった。
「ここがジオフロント……」
「話には聞いていたけど、こんなに広いだなんて」
「スッゲェーな。中世の地下水道がそのまま残ってるのかと思ったぜ」
「記録によると２０年前の都市計画と同時に建設が開始されたそうです」
「そんなもんがクロスベルの地下にあるとはな。おまけに魔獣の徘徊と来たか」
「確かこの上は……中央広場だったな」
ロイドが上を見上げてそう言う。
「普段は封鎖されているので、魔獣が市内に侵入することはないそうですが、たまに工事関係の作業員の方が襲われて怪我を負うそうです。ですが、現在、警察の方では対処が出来ていない状態です」
「……取り合えず、警察の仕事関係なしに、必要な仕事だと言うことは分かった。テストはともかくキチンとやり遂げよう」
「そうね。一つ一つ基本を確かめながら、進んでいきましょう」
「了解です」
「おっしゃ！パパッと終わらせちまおうぜ！」
「それじゃ、魔獣退治に行くとするか」
「よし、行こう！」

ジオフロント内での戦闘はジョンとロイド、ランディが前衛を務め、エリィとティオの二人が後衛で三人のサポートをする形で進んで行った。
ロイドのトンファーによる機動力と制圧力、ランディの重たい一撃、ジョンの精練された動きから繰り出される体術、そして、エリィの正確な狙撃とティオのアーツによるサポート。
組まされて一時間とは思えない程、五人のチームワークは完璧だった。
戦闘しつつ、時には回避してジオフロント内を進んでいると、エリィが足を止めた。
「エリィ、どうした？」
「今、誰かの泣き声が聞こえた気がして……」
「気の所為じゃないのか？そもそも、ここは封鎖されてるんだろ？」
「そうですね。あくまで公式には、ですが」
ティオがそう言うと、今度は五人の耳に泣き声が聞こえる。
「聞こえたわ！」
「ああ！今のは、俺も聞こえた！」
「おいおい、どういうことだよ!?」
「私に言われても……！」
「あのダクトからだ！」
ジョンが近くのダクトの換気口を開け、中に入る。
そして、数分後、ジョンは一人の子供を連れて戻って来た。
「ジョン、その子は？」
「どうやら、探検でここに迷い込んだらしい。だな、アンリ」
「は、はい…」
「たっく、俺は何度も言ったよな？子供だけで危ない所には行くなって。忘れたのか？」
「ち、違うよジョンさん！僕は止めようって言ったけど、リュウが平気だって言って入って行っちゃったから僕心配で……！」

「あの悪ガキ……どれだけ口酸っぱく言っても聞きやしねぇ……」
　アンリに目を合わせつつ、ジョンは頭を掻く。
「ジョン、その子と知り合いなのか？」
「ああ、まぁな。こいつはアンリ。住宅街に住んでるガキだ。こいつと、後リュウってガキが居るんだが、とんでもねぇ悪ガキでな。いくら叱っても反省しないんだよ。工事現場に入り込んだり、大人の付き添いなしで街道に出ようとしたり」
「それより、今その子、リュウって子もここに入ったって言わなかったか？」
　ロイドの言葉に、全員がハッとする。
「そうだ！アンリ、リュウは何処だ？」
「そ、それが、途中で怖い魔獣と出会っちゃって逃げてる内に逸れちゃったんだ……」
「急いだ方がいいな……ロイド、このまま進んでリュウを探したほうがいい。構わないか？」
「そうだな……一その子だけ地上に戻した方が安全かもしれないけど、事は一刻を争うし戦力を分散するのは得策じゃないか。君、すまないけどもう少し俺達に付き合ってくれるかい？」
「出来るか、アンリ？」
「は、はい。できます……」
「よし。エリィ、悪いがアンリを頼む」
「ええ、分かったわ」
　エリィがアンリと手を繋ぎ先に進む。
　大きなゲートをくぐると、一際広い区画へと出た。
「ここは……ジオフロントの中間地点か？」
「このまま進めば最深部です」
「だが、ここまで人っ子一人見てないぞ？」
「もっと奥かもしれないな」
「急がないと時間も厳しいわ。早く見つけてあげないと……」
「うわあああああああああ!!」
　五人で話し合ってると、遠くから子供の悲鳴が聞こえた。

「今のは!?」
「リュウの声だ！」
五人はアンリを連れて、急いで奥へと走る。
すると階段を上がった先には、スライム型の魔獣に囲まれる子供が居た。
「エリィ！魔獣の引き付けてくれ！」
「分かったわ！」
ロイドに言われ、エリィが導力銃を構える。
放たれた銃撃は全て魔獣に当たり、魔獣がジョンたちへと向かう。
「ジョン、ランディ！行くぞ！」
「おうよ！」
「ああ！」
襲い掛かるスライム型の魔獣《フロストグミ》にロイドが突っ込みトンファーで殴りつける。
そのロイドを襲おうと他のフロストグミがロイドを横から襲うが、ランディが間に入り、スタンハルバードを大きく振り回してダメージを与えつつ吹き飛ばす。
「《素流体術　肆ノ型　乱式》！」
ジョンは、足を肩幅に開いて腰を落とし、右手を腰の位置まで引き、左手の掌を相手に見せる様に開く構えを取る。
そこから、急接近し拳撃を乱打する。
拳のラッシュにフロストグミは耐えきれず、粉々に砕け散る。
「《アクセルラッシュ》！」
「これで終わりだ！《グリムゾンゲイル》！」
ロイドは回転しながら二体のフロストグミにダメージを与え、怯んだどころをランディがスタンハルバードに仕込まれている導力機で炎を起こし、薙ぎ払う様にフロストグミを焼き払う。
残りの二体も、エリィの射撃とティオのアーツで倒され、無事リュウの救出が出来た。
「兄ちゃんたちスゲェな！」
リュウはさっきまで魔獣に襲われかけていたことなど忘れ、魔獣を

一瞬で蹴散らしたロイド達に声を上げる。
「見たことない顔だけど、新人の人？」
「そうだけど、よく分かったな。制服だって着てないのに」
「「制服？」」
　ロイドの言葉に、リュウとアンリは首を傾げる。
「えっと……もしかしてお兄さんたちギルドの人じゃないんですか？」
「え？」
「ギルドって、もしかして《遊撃士協会（ブレイザーギルド）》の事？」
「ギルドって言ったらそれしかないじゃん。てか、兄ちゃんたち遊撃士じゃないの？」
「あ、ああ。俺達はクロスベル警察の新人だ」
「えええぇぇぇ!!」
　ロイドの言葉にリュウが大声を上げる。
「どうしてケーサツのお巡りがこんな所に居るんだよ！」
「そ、そんなに驚く事か？」
「だってケーサツのお巡りって言ったら腰抜けで有名じゃん！ケーサツは横柄で全然頼りにならない、遊撃士の方が何十倍も頼りになるって父ちゃん言ってたぞ！」
　リュウの言葉にロイドは驚きを隠せなかった。
　ランディやティオも驚いたのか口を開けてポカンとする。
「やっぱり……」
　唯一エリィだけは分かっているかのような表情で俯く。
「りゅ、リュウ失礼だよ。助けてもらったのに」
「でもさぁ～、折角ギルドの新人に助けてもらったと思ったのに痛っ！」
　すると、ジョンがリュウの頭を拳骨で殴る。
「何すんだよってジョン兄ちゃん!?どうしてケーサツなんかと一緒にいるんだよ!?」
「今日から警察の仕事を手伝うことになったんだよ。それよりリュウ！なんだその態度は！助けてもらって文句か？」

「だ、だって……」
「だってもへったくれあるか！相手が警察でも遊撃士でも、助けられたらお礼を言う、常識だろ！ロイド達が助けに来なけりゃ、お前今頃魔獣に喰われてたかもしれないんだぞ！」
「うっ……」
「そもそもだ、子供だけで危ない所に行くなって俺前にも言ったよな！これで何度目だ、約束破るの！」
「……」
「それにアンリ！」
「は、はい！」
「リュウが心配なのは分かるが、お前までリュウに付いて行ったらダメだろ！そういう時はすぐに大人を呼べ！」
「す、すみません…ジョンさん……」
ジョンに怒られ、二人はしょぼくれる。
そんな二人を見て、ジョンは頭を掻き、溜息を零す。
そして、二人に近寄り腰を落として二人の頭に手を置く。
「怪我はないか、二人とも」
「う、うん」
「……僕もありません」
「そうか……なら良かった」
さっきとは打って変わって、ジョンは優しい笑顔を浮かべる。
「悪かったな。もうちょっと早く助けに来てりゃ怖い思いせず済んだのにな」
「ううん、俺が約束守らなかったのが悪いんだ。ごめん、ジョン兄ちゃん」
「僕もすぐに大人を呼べばよかったのに……ごめんなさい、ジョンさん」
「いいんだよ。その代わり、次こそ約束守れよ。でないと、次はお前らの母ちゃん父ちゃんに報告するからな」
「おう！」「はい！」
「よし、いい子だ」

最後に二人の頭を撫で、ジョンは立ち上がる。
「さて、ロイド！警察本部に行く前に二人を家まで送ってもいいか？」
「ああ、構わないよ。ともかく、ここから出よう」
アンリとリュウの二人を保護し、入り口に戻ろうとしたその時だった。
頭上から、巨大な魔獣が降って来てジョンたちの退路を塞いだ。
「なっ!?」
「なんで大きさなの!?」
「まずいぞ！今の装備じゃ勝ち目がねぇ！」
「仕方ない……ランディ、ジョン！二人で子供を抱えて、エリィとティオと逃げてくれ！」
「なんだと!?」
「俺が時間を稼ぐ！その隙に逃げろ！俺も時間を稼いだら逃げる！」
「一人でどうやって逃げるんだよ」
ジョンはそう言ってロイドの隣に並ぶ。
「二人より二人で時間を稼ぐ方がいい。それに二人の方が逃げやすいだろ」
ジョンとロイドは覚悟を決め、魔獣と対峙する。
（くっ……！それしかねぇのか！）
ランディは歯噛みをしながら、他の方法を何とか模索しようとする。
「自己犠牲もいいが、少々短絡的だな」
その声と共に、刀を持った長髪の男性が魔獣の背後に現れた。
そして次の瞬間、魔獣は細切れに切り裂かれ消滅していた。
「今のは……！」
「速い……！」
「全然見えませんでした……」
「何モンだ？」
「また助けられちまったか……」
ロイド達が驚いてる中、ジョンはソフト帽を外し自身を仰ぐ。
「すげー！スゲーよ、アリオスさん！」

「でも、どうしてここに……？」
　アンリとリュウは興奮気味にアリオスに駆け寄る。
「広場のマンホールの蓋が開いていて、そこに子供が入っていくのを見たと通報があってな」
「何はともあれ、助かったぜ。アリオスさん」
　ジョンはソフト帽を被り直し、長髪の男性〝アリオス〟に近寄る。
「ジョンか。後ろの彼らは……そうか、お前が前言ってたメンバーか」
「まぁな。取り合えず、入り口まで一緒にいいか？」
「構わない。お前達も夕方だ。早く家に帰りなさい」
「「はーい！」」
　歩き出すアリオスの背中をアンリとリュウの二人が追いかける。
「ジョン、あのオッサンとも知り合いなのか？なんて言うかオーラが違うんだが……」
「腕前も普通じゃありませんでしたけど」
　ランディとティオがジョンに近寄って聞いてくる。
「ああ。あの人は、アリオス・マクレイン。クロスベルが誇る遊撃士協会クロスベル支部のＡ級遊撃士さ」
「あの人が……」
　ジョンの言葉にエリィは納得した様に言、ロイドもその名前を思い出す
「クロスベルタイムズで何度が目にしたことがある。どんな依頼も完璧に熟し、市民からの絶大な信頼を得ているクロスベルの守護者……あれが《風の剣聖》アリオス・マクレイン……」